

困難なことが多い。このため進行胆嚢癌30例の術前超音波像と病理組織学所見との対比検討を行った。エコー像の分類は隆起型11例、壁肥厚型17例、混合型2例の3型に分類された。隆起型は肉眼形態が乳頭型・乳頭浸潤型・内腔充満型よりなりエコーレベルは上皮内の癌組織を反映し9例が等から低エコーを示した。高エコーを呈した2例では広範な腫瘍壊死と cholesterosis を伴っていた症例であった。壁肥厚型は結節型・結節浸潤型・浸潤型よりなり癌腺管周囲の間質に fibroblast collagen の増生を反映し15例は高エコーを示した。低エコーを呈した2例は髓様癌であった。現在のところエコーレベルの評価は主観的であるが胆嚢病変の質的診断には重要な factor である。

3) 胆管癌における CT の意義

捧 彰・椎名 真 (新潟大学放射線科)

胆管癌症例8例について検討した。使用したCTは、シーメンス社製ソフトム DR3。スライス厚は8mm、8mm 間隔、一部4mm 厚、4mm 間隔とした。

症例数は少ないが、結節浸潤型は、周囲リンパ節と一塊の腫瘍として、また浸潤型は、enhance CT にて胆管内を充満する soft tissue density として認められる印象を受けた。リンパ節の評価は、CT が Echo に勝り、そのためには尾状葉、十二指腸、総肝動脈、固有肝動脈、門脈、上腸間膜静脈、胆管の固定が重要であると考えられた。Hinf, P 因子の判定は、CT, Echo とともに困難であった。

4) 胆道疾患と画像診断

—内視鏡検査を中心に—

関根 厚雄 (新潟県立吉田病院内科)
吉岡 一典 (" 外科)

昭和55年から61年迄の7年間における胆道癌85例に対し ERC を施行した61例に対し ERC の役割を検討した。胆道の造影率はほぼ 100% に近いが切除率は胆嚢癌の3割、胆管癌の4割強であった。

胆嚢不影例は22例60%でありこのうち4例のみが切除可能であった。ERC の診断能は良好であったが、12例に最終診断との不一致例があった。組織学的に胆嚢癌であった胆石症の4例、又胆嚢癌の胆管浸潤の1例は各種診断法を加味しても術前診断は困難であった。更に胆管に拡張をみない胆管癌も同様であった。従って ERC像

のみでは切除の可否を判断するには、非常に困難である。いまだ進行癌が多く黄疸を主症状として来院する例が多く、今後内視鏡の使命は診断と共にドレナージを主とする治療の中心的な役割を担う事と思われる。

5) 胆道疾患における超音波内視鏡の現況

阿部 実・富樫 満	
植木 淳一・柳沢 善計	
秋山 修宏・尾崎 俊彦	
成澤林太郎・上村 朝輝	
市田 文弘	(新潟大学第三内科)
川口 英弘・吉田 奎介	(" 第一外科)
内田 克之・渡辺 英伸	(" 第一病理)
馬場 佳弘	(白根健生病院内科)
福田 稔	(" 外科)

昭和61年3月より超音波内視鏡(EUS)を147例に施行しその中で、胆道系は胆嚢癌6例、胆嚢結石18例、胆嚢ポリープ16例、胆管結石3例、計43例であった。EUSが有用と思われた点は、①体外式USに比し高周波のため解像力が高い、②胆嚢の壁構造が描出されることから胆嚢癌の深達度診断が可能、③体外式USに比し胆嚢管の観察が容易。問題点は、①内視鏡検査のため体外式USに比し苦痛が大きく操作性が悪い、②高周波のため観察可能範囲が狭い。

特 別 講 演

I 肝門部胆管癌の外科的治療

三重大学第一外科助教授

川原田 嘉 文 先生

II 膵・胆管合流異常をめぐる諸問題

—とくに発癌を中心に—

香川医科大学小児外科助教授

戸 谷 拓 二 先生